



Title	山我 哲雄訳「出エジプト記 レビ記」
Author(s)	柗, 暁生
Citation	基督教学, 36, 34-36
Issue Date	2001-06-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46631
Type	other
File Information	36_34-36.pdf



[Instructions for use](#)

山我哲雄訳

『出エジプト記 レビ記』

終 曉 生

本書は岩波版旧約聖書翻訳シリーズの第二巻である。

出エジプト記の物語部分である1～24章、32～34章の翻訳は木幡藤子氏、祭儀法部分である25～31章、35～40章は山我哲雄氏の翻訳であり、レビ記はすべて山我哲雄氏の翻訳である。ここでは北海道基督教学会編集委員会の依頼に当たって山我哲雄氏の翻訳部分に限って書評させていただく。

訳者の担当する翻訳箇所は、その大部分が祭司文書で、「一般に祭司文書の文体は、固定的・画一的な表現の繰り返し返しが多く、また晦渋かつ無味乾燥で、饒舌で回りくどい表現に満ちており、非常な悪文であると言われる」（「レビ記 解説」425～426頁）それゆえ、祭司文

書の翻訳には誰しも困難を感じるわけで、訳者は「たとえ本書の翻訳部分が非常に読みにくいものであったとしても、その全てが訳者の力不足のせいだけではないことにも読者諸氏のご理解が得られれば幸いである」（426頁）と言う。レビ記20章2節の脚注四で「まわりくどい訳文になってしまいが、原文そのものがまわりくどい。」（336頁）と訳者が言うのもゆえなしとしない。

訳語に関して、訳者は細心の注意をはらい、たとえば、「タハシユ」という不明な語―新共同訳では「じゅごん」―はそのまま「タハシユ」（出25:15）とし、補注で「水棲動物の名で、正確に何を指すかは不明であるが、しばしばジュゴン、もしくはイルカと解される」と説明する。また、新共同訳で「重い皮膚病」と訳される「ツァアラト」も原語のまま「ツァアラト」（レビ13～14章）とし、補注でその理由を解説するが、これは他に例を見ない訳ではないかと思われる。

脚注は懇切丁寧であり、しばしばテキストの問題にふれている。たとえば「城壁のある町」（レビ記25:30）

はマソラ本文では「城壁のない町」であるが、「29節の内容や七十人訳等に從つてこう訳す。発音の似ている『それに(ロー)』が『ない(ロー)』と誤記されたもの」(371頁、脚注十)と説明する。また、編集者の加筆の可能性にもふれ(レビ3:8の脚注八など)、ある時は七十人訳や、サマリア五書、さらにはベシッタを参照するが(レビ8:8の脚注七)、ある時は七十人訳やウルガータが原文を「改訂」しているとする(レビ3:8の脚注八など)。

出エジプト記25章9節の翻訳「宿り場」の脚注では、「原語ミシユカーン。『宿る(シャーカン)』という動詞の派生語で、『会見の幕屋』の別名。この動詞は恒久的な定住ではなく、天幕などを用いた一時的な滞在を表現する」と説明する。口語訳、新共同訳では「幕屋」と訳されている語であるが、一時的な滞在の場所であるゆえに「宿り場」と区別して訳されたものであると考えられる。ただ評者には「宿り場」と言う日本語が今ひとつしっくりこない感じで、神学的な意味合いをもつ語をいかに和訳するか、むつかしい問題を含んでいると思われる。

また、原文を原文通り訳す場合、たとえば「『…果してそれがヤハウエの目によいことに映つたでしょうか』モーセはこれを聞いた。それは、彼の目にはよいことに映つた」(レビ10:19-20)の脚注一五では「最後の一句の意味はやや曖昧である。ここであえて直訳した『…の目によいことに映る』という表現は、ヘブライ語では通常、事柄への賛同や承認を意味する。…」(274頁)と記し、その後さらに何故このように原文通りに訳したかを説明しているが、評者も基本的にはなるべく原文通りに訳するのがよいと考える者で、たとえば、「未割礼の心」(レビ26:41)は脚注八で「穢れた心、頑な心の意味」(383頁)と説明され、それは42節のアブラハムとの契約の関係があるので適切であると思われる。

レビ記19章18節(マコ12:28-34他)は有名な隣人愛の教えの箇所であるが、それを訳者は「むしろ」あなたは、あなたの隣人に対し、あなた自身と同じような者として友愛をもって接しなさい。」と翻訳する。理由として「原文の正確な意味は必ずしも明らかでない」としつつも、「文型からは、『あなた「自身」のように(カモ一

ハ―』という語は、『自分自身を愛するように隣人を愛しなさい』（新共同訳）ということではなく、むしろ隣人を自分と同等のものとして扱うように述べたものに見える（原文には『愛する』という動詞は一つしかない！）と言い、さらに34節との並行関係や、前置詞が「エト」ではなく、「レ」である点を指摘する（331頁、脚注一二）確かに動詞アハブ（愛する）は前置詞として「エト」を取ることが多く、（創25：28、29：18、サム下19：7等々）、ただ前置詞を取らない場合もあり、申命記10章18節の「寄留者を愛して」（新共同訳）には前置詞「エト」がなく、19節の「寄留者を愛しなさい」（同）には「エト」があるといった具合である。サムエル記上18章1節にはケレーの問題をかかえつつも、「ヨナタンは自分自身のようにダビデ（＝彼）を愛した」（新共同訳）という文章があり、この「自分自身のように」はク（＝ように）・ナプシヨ（彼のネフェシユ）である。ちなみに、新約聖書のヘブライ語訳（Louis Second訳）ではマタイ22：40、マルコ12：31ではレビ記のように前置詞「レ」を使うが、ルカ10：27では前置詞「エト」を用いている。

レビ記19章18節の翻訳は、訳者のこれらの指摘以外にも、17、18節との文脈との関係も考慮に入れて考えるべきであり、また隣人が誰をさすのかも定義すべき問題であろう。そうした意味において山我氏の当該箇所の翻訳は我々に大きな課題を提出していると考えられる。

以上、いくつか気づいた点を取り上げてみたが、その他、図版、写真、図表などが豊富であり、読者の理解を助けるものとしてあり、解説もまた供犠、供物、購いの観念、聖、俗、穢れについて整理されていて便利である。現代の我々にとつては、やや退屈で、読むのに困難をおぼえる出エジプト記25～31章、35～40章、レビ記ではあるが、訳者の広汎な知識の説明で――たとえば食物規定の生き物に関する脚注など――、興味深く読みすすむことができる翻訳である。